

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

I-JAS

インタビューデータにおける日本語学習者の副詞「  
やはり」の使用実態：  
日本語母語話者との比較を通して

メタデータ	言語: 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 英子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000155">https://doi.org/10.15084/0002000155</a>

# I-JAS インタビューデータにおける 日本語学習者の副詞「やはり」の使用実態 ——日本語母語話者との比較を通して——

鈴木英子

一橋大学大学院 博士後期課程／国立国語研究所 共同研究員

## 要旨

副詞「やはり」の研究は、形態的バリエーションや複数の意味・機能を中心に、母語話者の使用をめぐって議論が進む一方、日本語教育のための学習者の使用実態の調査は不足している。そこで、学習者と母語話者の使用実態の比較ができる I-JAS のデータを用い、副詞「やはり」の使用数、形式、出現位置、意味・機能から見た使用実態を調査した。その結果、次の4点が観察された。①母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では学習者は総じて、副詞「やはり」を母語話者に比べてあまり多用しない。②副詞「やはり」の3形式では、学習者は「やっぱり」「やはり」「やっぱ」の順に、母語話者は「やっぱり」「やっぱ」「やはり」の順に使用している。③学習者は発話開始部での副詞「やはり」の出現が多い。質問に対して回答する際に「熟考の結果」の意味・機能で用いることが多い。④母語話者は発話中間部での副詞「やはり」の出現が多く、複文の中で逆接・順接の接続表現に後接する環境で、会話の前提や共通基盤を述べる際に用いている\*。

キーワード：学習者コーパス、インタビューデータ、「やっぱり」、「やっぱ」、意味・機能

## 1. はじめに

副詞「やはり」は、他に「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の形式<sup>1</sup>を持ち、日本語母語話者（以下、母語話者）の会話に頻出する副詞である。また、日常生活の中で私達が触れる副詞「やはり」は、(1)の電車の中の高校生の会話<sup>2</sup>のように多義的に用いられ、複数の意味・機能<sup>3</sup>を持っていると指摘されている（西原 1988, 森本 1994, 蓮沼 1998, 加藤 1999 など）。

(1) A: B ちゃん、コースどうする？

B: んー、やっぱ（≒いろいろ考えて）文系に変更するしかないかな。昨日の物理のテスト、

\* 本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のサブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」（いずれもプロジェクトリーダー：石黒圭）の研究成果である。本稿は、学習者コーパス研究会（2019年7月6日）での発表、「対話における前提を持つ副詞「やはり」の使用実態—「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の調査から—」を加筆・修正したものである。

<sup>1</sup> 副詞「やはり」の形式には他に「やっぱり」「やっぱ」「やっぱし」があるが、文体的、位相的な違いを除けば意味・機能は変わらないと考える。本稿では「やはり」に代表させる。

<sup>2</sup> 引用した用例はコーパス、ネットの記載、先行研究、観察などによる。I-JAS データから引用している会話はサンプル ID を付した。文字化記号は I-JAS における記号表記に則っている。下線は稿者が施した。

<sup>3</sup> 森本（1994）で「副詞の意味的構造については、対象となるものが語彙的意味なのか、機能なのか、あるいは両方なのか、判然としにくいことが少なくない。その複雑さの程度は副詞によって異なっている」とし、意味、機能の問題を追及せず「意味／機能」とするとある。本稿は、森本（1994）の説をとり「意味・機能」とする。

平均点いかなかった。

A：私も山ちゃんもやっぱり（≒同様に）平均点以下だよ。あーあーだね。

B：最高点は湯川君だって。

A：やっぱり。（≒予期した通り）（観察による作例）

また、副詞「やはり」は発話時に話し手の認識を表す副詞であり、聞き手にとって話し手の発話意図を推測する手掛かりとなる談話標識でもある。複数の形式、複数の意味・機能を持つ副詞「やはり」を理解し適切に使用することは、円滑なコミュニケーション構築に繋がると考える。

では、日本語学習者（以下、学習者）にとって、副詞「やはり」の使用はどうだろう。日本語教育の中で副詞「やはり」は『日本語能力試験出題基準 改訂版』（国際交流基金・日本国際教育支援協会（編著）2007）では3級語とされており、現行の日本語教材の中では、表1に示したように、中級前期段階の会話・読解の中で導入されている。初出の副詞「やはり」であることから、教材の作成者が重要と考える「やはり」の意味・機能で最も基本的なものが提示されていると考えられる。いずれの教材も、語彙知識としての副詞「やはり」の指導を目的としたものであり、談話での運用を考慮した指導法の提示は確認できない。中級レベルでの副詞「やはり」導入のあと、学習者は副詞「やはり」の複数の形式をどのように選択し、複数の意味・機能をどのように使い分けているのか、その実態についての調査は不足している。

そこで、本稿では学習者の副詞「やはり」の使用の実態を解明するため、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（International Corpus of Japanese as a Second Language, 以下 I-JAS）のインタビューデータを用いて調査し、母語話者との比較を通して検討する。

表1 日本語教材における初出の副詞「やはり」の扱い

日本語教材	提出課	提出の設定	形式	意味・機能
『J-Bridge Vol.1』	L19	会話：先生と	やっぱり	熟考の結果
『みんなの日本語中級 I』	L11	会話：先輩と	やっぱり	熟考の結果
『新日本語の中級』	L19	会話：同僚と	やっぱり	熟考の結果
『新日本語の中級』	L19	読解：意見述べ	やはり	熟考の結果
『日本語の中級 J301』	L3	読解：相談・回答	やはり	同じ結果に帰結
『日本語の中級 J501』	L6	文法：「～なんて」	やっぱり	予期した通り／帰結
『文化中級日本語 I』	L1	読解：体験談	やはり	依然として
『日本語能力試験出題基準改訂版』	3級語	3・4級語彙	やはり	—

## 2. 先行研究

### 2.1 副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究

副詞「やはり」の副詞分類上の位置は、従来の研究に従い「陳述副詞」（山田 1936）、「誘導副詞」（渡辺 1971）であり、呼応がなく（工藤 1982）、発話時に話し手の主観を表す（森本 1994）一群に属しているという立場で論を進めることとする。次に、副詞「やはり」の複数の意味・機能については、多くの研究の蓄積の中から、森田（1989）、森山（1989）、金水（1992）、深尾（1995）、蓮沼（1998）、加藤（1999）を援用し、本稿においては（1）とし、複数の意味・機能を表2のよ

うに捉えることとする。

- (1) 副詞「やはり」は「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」というスキーマの意味を持つ。「概念内の何と照合するか」によって副詞「やはり」に異なった意味・機能が生じる。

表2 本稿における副詞「やはり」の意味・機能

働く領域	照合	意味・機能	用例
知覚・知識 (事実由来の認識)	外界の 新情報	I-1: 依然として	ストーブをつけたが、やはり寒い。
		I-2: 同様に	彼もやはり国家試験を目指している。
		I-3: 同じ結果に帰結	利口そうでもやはり子供は子供だ。
		II: 予期した通り	待ち合わせの時間に、やはり彼は遅れた。
評価・判断 (思考由来の認識)	話し手内の 評価や判断	III: 熟考した結果	やっぱり私は留学したい。
		IV: 他の選択肢を排除	車で行こうかな。ん、やっぱり電車にしよう。
		V: 形式・内容を選択途中	そーっすねー やっぱり、あの、まあ、……

## 2.2 副詞「やはり」の形式に関わる研究

副詞「やはり」の形式に関わる研究としては、小磯 (2019) と山崎 (2019) がある。小磯 (2019) では、『日本語日常会話コーパス』(CEJC) を用いた研究の可能性が述べられている。その中で副詞「やはり」の4つの形式「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」に着目し、『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 間で出現数の割合を比較している。その結果、4形式の出現率は書き言葉か話し言葉かによって異なり、さらに書き言葉の場合はレジスターが何か、話し言葉の場合は独話か対話かによって異なることを指摘している。日常場面で自然に生じる会話を記録した CEJC では、「やっぱり」「やっぱ」の使用が多く「やはり」は観察されなかった<sup>4</sup>こと、話者の年代による傾向では、若者は「やっぱ」の使用率が高く、年齢が上がるに従い「やっぱり」の使用率が高くなることが報告されている。

山崎 (2019) では、国立国語研究所のコーパス開発センターで公開しているコーパスの中でコーパス検索 Web アプリケーション「中納言」に搭載されているコーパスの統計情報を紹介する論の中で、小磯 (2019) でも論じられていた書き言葉における頻度の分布をレジスターと語形により詳細にまとめている。BCCWJ に出現する副詞「やはり」の語形は「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」「やば」「やぱり」の6種類があり、書き言葉に関してはレジスターによって「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の4形式の出現傾向に特徴があることが示されている。まず、各レジスター別の4形式の出現に関して、「法律」では副詞「やはり」が一例も出現していないこと、「白書」では「やはり」のみ出現していること、「国会会議録」では、「やはり」が「やっぱり」の4.8倍出現していると述べている。次に、「やはり」と「やっぱり」については、「新聞」「出版・書籍」「ベストセラー」「図書館・書籍」では「やはり」は「やっぱり」の2倍程度出現しているのに対し、「知恵袋」「雑誌」「韻文」「ブログ」では「やはり」と「やっぱり」が同程度出現

<sup>4</sup> 2018年版(50時間版)には副詞「やはり」の出現がなかったが、2022年版には出現している。

していること、「やっぱ」の出現はごくわずかで、「雑誌」や書き言葉と話し言葉の中間に位置するレジスターである「ブログ」「知恵袋」で出現していることが報告されている。

### 2.3 「やはり」学習者の習得に関わる研究

川口（1993）は副詞「やはり」の持つ前提に着目し、その習得を扱った研究である。論の中で、西原（1988）を受け副詞「やはり」は「話者の主観」「客観的状况」「社会通念」の3種類の語用論的前提を持つとし、母語話者513名（中学校1・3年生、高校2年生、大学生、社会人）と日本語学習歴1年以上の学習者59名へのアンケートにより習得状況を調査している。母語話者の年齢別の習得と学習者の習得の順序を検証した結果、母語話者も学習者も、習得は「話者の主観」「客観的状况」「社会通念」の順に進むことを報告している。さらに、学習者が副詞「やはり」の使用法を学ぶには、日本社会における「社会通念」を学ぶ必要があると結論している。川口（1993）は副詞「やはり」の理解に焦点を当てた研究で、調査対象の分類基準となった3種類の語用論的前提である「話者の主観」「客観的状况」「社会通念」は、それぞれ表2に示した「話者の主観＝「待ち合わせの時間に、やはり彼は遅れた」＝II 予期した通り」「客観的状况＝「彼もやはり国家試験を目指している」＝I-2 同様に」「社会通念＝「利口そうでもやはり子供は子供だ」＝I-3 同じ結果に帰結」に相当する。副詞「やはり」の複数の意味・機能の中では、「知覚・知識」に関わる部分を対象とした研究である。

### 2.4 本稿の目的

本稿は、副詞「やはり」を解明し、日本語教育に資する情報を得ることを目的とする研究の一部に属している。前述した通り、副詞「やはり」の副詞分類上での位置と意味・機能を記述することに主眼が置かれた研究、母語話者の4形式の使い分けが実証的に示されている研究は、いずれも副詞「やはり」考察の基礎となる研究である。川口（1993）は、副詞「やはり」の習得を扱い、約600名の対象者に文中での「やはり」の意味を記述してもらう方式でデータを集め考察を加えた意義ある研究であると考えられる。しかし、学習者の産出についての調査と、副詞「やはり」の意味・機能の中で表2で見た知覚・知識に関わる「やはり」だけでなく判断・評価に関わる「やはり」も含めた副詞「やはり」の意味・機能全体についての調査は不足している。

学習者は日本語の習熟度が増す中でどのように副詞「やはり」の複数の意味・機能と複数の形式を使用しているか、実態の解明を通して副詞「やはり」の指導の検討に繋がりたいと考えた。そこで、学習者と母語話者の使用実態がパラレルに観察できる構造を持ったI-JASのデータを用い、学習者の使用実態を次の2点から明らかにすることを試みた。

- 1) 副詞「やはり」の使用数、形式から見た使用実態はどのようなものか。
- 2) 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用実態はどのようなものか。

### 3. 調査の概要

#### 3.1 調査の方法

I-JAS (中納言 2.4.5, データバージョン 2020.03) を用いた調査を次の手順で行う。

- ① I-JAS のデータで, 本稿で調査対象とするタスク, 対象者を絞る。
- ② コーパス検索アプリケーション I-JAS データを『中納言』を利用して「矢張り」(前後文脈の語数 100) をダウンロードする。同時に, データ配布サイトから, プレインテキストと音声ファイルを入手する。
- ③ ②のデータに基づき, 使用数, 形式から見た学習者の使用実態を母語話者との比較を通してまとめる。
- ④ ②のデータに基づき, 出現位置と意味・機能から見た学習者の使用の特徴を母語話者との比較を通してまとめる。

#### 3.2 使用データ

I-JAS は「第二言語としての日本語の習得研究とし, さまざまな要因の違いが日本語習得にいかに関与を与えるかを日本語学, 言語学, 社会言語学, 心理言語学, 語彙論, 談話研究などの領域から分析することを目的」(迫田ら 2016) として構築され, 2020 年 3 月に完成した学習者コーパスである。日本を含む 13 の国と地域で, 12 の言語を母語とする学習者の話し言葉および書き言葉を横断的に調査・収集したコーパスで, 1050 人 (学習者 1000 人, 母語話者 50 人) のデータが公開されている。収録されている課題には, 発話データ (独話, 対話, ロールプレイ) と, 作文データ (ストーリーライティング, メール, エッセイ) がある。

本稿では, 多様な学習歴を持つ JSL 環境の学習者は除き, JFL 環境の学習者を対象とした。分析対象者は第 4 次公開までのデータ, 「JFL 学習者」650 名<sup>5</sup> (12 の言語, 13 の地域を母語とする学習者各 50 名), 「日本語母語話者」50 名の計 700 名のデータを使用した。

調査対象とする課題は, 約 30 分の半構造化インタビューを収録した「対話」のデータを使用することとした。「対話」データの特徴を迫田ら (2016) では, 「①学習者の自然な言語運用のデータが収録できることを目的としている。② OPI (Oral Proficiency Interview) を参考にしており, OPI テスターの資格を有した調査員が調査を実施している。③ほぼ統一された 15 の話題に沿って対話を展開し, データ間での比較ができるようにしている」と記している。

### 4. 副詞「やはり」の出現数, 形式から見た使用傾向

#### 4.1 母語別の使用数から見た使用傾向

対象のデータで, 学習者の母語の別による副詞「やはり」の使用数を集計した。集計に当たり, 母語別に個人の使用数の分布を図 1 にまとめた。この結果から明らかになった, 個人で極めて多量に使用している 6 名を, 外れ値として集計から外した。6 名の内訳は, 英語母語話者 2 名 (57 回・48 回),

<sup>5</sup> 2020 年 3 月時点で, 5 次公開のデータが公開されている。本稿では, 4 次公開までのデータを使用した。中国語学習者は, 3 次公開までの 50 名のデータを使用している。

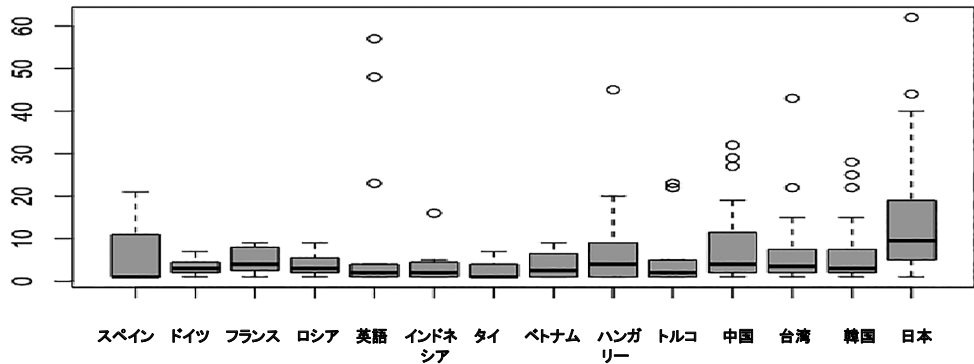


図1 母語別の個人の使用数の分布

ハンガリー語母語話者 1 名 (45 回), 中国語 (台湾) 母語話者 1 名 (43 回), 日本語母語話者 2 名 (62 回・44 回) である。外れ値を外して集計した使用数から見た使用実態を表 3 に, 副詞「やはり」の使用数から算出した 100 万語あたりの母語別の調整頻度 (PMW) を図 2 に示した。

表 3 母語別の使用数から見た使用実態

母語	調査人数	使用人数	(%)	使用数	平均 *1	使用者平均 *2	PMW
スペイン語	50	3	(6.0)	23	0.5	7.7	252.22
ドイツ語	50	11	(22.0)	37	0.7	3.4	300.39
フランス語	50	7	(14.0)	35	0.7	5	379.65
ロシア語	50	11	(22.0)	47	0.9	4.3	394.47
英語	48	12	(25.0)	43	0.9	3.6	204.05
インドネシア語	50	7	(14.0)	30	0.6	4.3	273.31
タイ語	50	12	(24.0)	29	0.6	2.4	251.51
ベトナム語	50	5	(10.0)	15	0.3	3.0	141.44
ハンガリー語	49	15	(30.6)	87	1.8	5.8	771.50
トルコ語	50	9	(18.0)	58	1.2	6.4	516.63
中国語	50	31	(62.0)	245	4.9	7.9	1090.53
中国語 (台湾)	49	23	(46.9)	117	2.4	5.1	513.03
韓国語	50	27	(54.0)	179	3.6	6.6	635.25
学習者計	646	173	(26.7)	1138	1.8	6.5	534.23
日本語	48	48	(100)	587	15.2	15.2	3412.33
総計	694	220	(31.7)	1831	2.6	7.6	859.55

表中, 平均 \*1 は「使用数／調査人数」, 使用者平均 \*2 「使用数／使用人数」で算出

この結果から, 次の傾向が観察できた。母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では, 日本語母語話者の使用に特徴がある。まず, 「使用した人の割合」では, 日本語母語話者の調査対象者全員が副詞「やはり」を使用しているのに対して, 学習者の使用している割合は 26.7% で, 4 人中 3 人が使用していないという結果になっている。

次に, 使用した個人の平均も (使用数／調査人数) は学習者は 6.5 回であるのに対し, 日本語

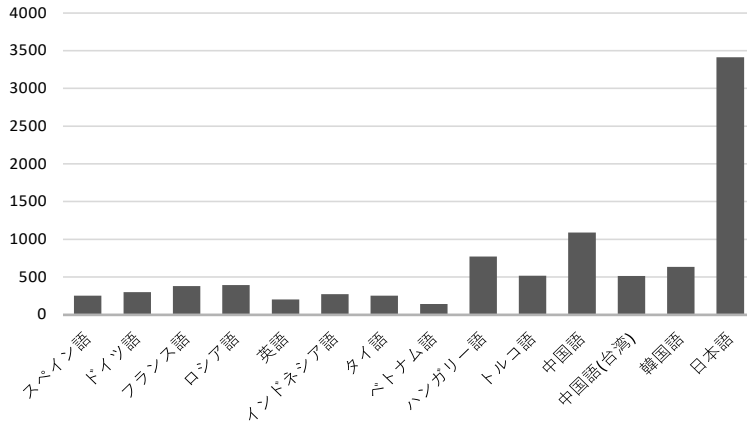


図2 母語別の調整頻度 (PMW)

母語話者は2倍強の15.2回使用している。

学習者の4分の3が副詞「やはり」を使用していないことは、学習者のレベルによる影響があると考えられる。副詞「やはり」は『旧日本語能力試験出題基準』では3級語であり、日本語教育の中では、中級前期段階で導入されることが多い。会話の中で産出するまでにはタイムラグがあると考えるのが妥当だろう。SPOTの結果<sup>6</sup>による学習者のレベル別の使用人数は表4の通りで、レベルが上がるにつれ、使用の割合は初級(5.5%)、中級(27.5%)、上級(68.9%)と増えているが、このデータで母語話者の100%が副詞「やはり」を使用することとは隔たりがある。また、「やはり」を極めて多用しているとして集計から外した4名の日本語学習歴を見ると、SPOTの結果ではいずれも中級レベルではあるが、「1年の日本留学経験がある(2名)」「2か月の日本留学とホームステイ経験がある(1名)」「日本語を話す家族がいる(1名)」となっており、日本語母語話者との対面での交流を有する4名であった。日本語母語話者との豊富な接触経験が「やはり」の多用に影響を及ぼしていることが見てとれる。

表4 レベル別の学習者人数

学習者レベル	調査人数	使用人数	(%)
初級	127	7	(5.5)
中級	462	127	(27.5)
上級	61	42	(68.9)
総計	* 650	* 176	(27.1)

\*外れ値の学習者も含めた数値である

<sup>6</sup> I-JASには、「SPOT」「J-CAT」の結果が記載されている。本稿では「SPOT」の得点を「SPOTレベルの目安」に基づいて互換し「初級」「中級」「上級」を定めた。「SPOT」では上級レベル61名(9.4%)、中級レベル462名(71.1%)、初級レベル127名(19.5%)、「J-CAT」では上級レベル101名(15.5%)、中級レベル523名(80.4%)、初級レベル26名(4.0%)となっている。人数のバランスを考慮し「SPOT」の得点を使用した。



## 4.2 出現形式から見た使用傾向

副詞「やはり」の形式には「やはり」「やっぱり」「やっぱ」「やっぱし」があることは前述したが、4種類の形式が統合されることなく用いられている。レベル別の学習者と母語話者に加え、参考としてCEJCでの出現形式を集計し表5に示した。

結果から、次の点が観察できた。I-JAS インタビューデータにおいて学習者が使用した形式は、「やっぱり」を使用する割合が79.9%で最も多く、母語話者が使用した割合75.5%に近かった。「やはり」は初級21.4%、中級17.1%、上級12.0%と漸減し、反対に「やっぱ」は初級0.0%、中級2.4%、上級10.7%と漸増している。

表5 副詞「やはり」の形式別の使用数と割合

	やはり (%)	やっぱり (%)	やっぱし (%)	やっぱ (%)	総計
初級学習者	3 (21.4)	11 (78.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	14
中級学習者	152 (17.1)	717 (80.6)	0 (0.0)	21 (2.4)	890
上級学習者	28 (12.0)	181 (77.3)	0 (0.0)	25 (10.7)	234
学習者計	183 (16.1)	909 (79.9)	0 (0.0)	46 (4.0)	1138
母語話者	30 (4.3)	523 (75.5)	1 (0.1)	139 (20.1)	693
【参考】CEJC	41 (0.9)	2316 (53.2)	47 (1.1)	1949 (44.8)	4353

さらに、「やはり」と「やっぱ」の使用について考えたい。

まず、「やはり」を使用する割合は、I-JAS 母語話者は4.3%、CEJC 母語話者は0.9%であるのに対し、I-JAS 学習者は16.1%であり、学習者は「やはり」を使用する割合が高いが、このことは学習者が使用した教材に関係があると考えられる。日本で作成された中級レベルの教材では、副詞「やはり」が読解や文法の例文で提示される場合は「やはり」の形式、会話で提示される場合は「やっぱり」の形式で提示されていることがJFL 教室環境の学習者の使用する形式に影響を与えていると考える。

次に、「やっぱ」を使用する割合は、上級レベルの学習者でも10.7%と、I-JAS 母語話者20.1%、CEJC 母語話者44.8%の使用率とは隔たりがある。しかし、「やはり」「やっぱり」の形式で指導を受けたJFL 教室環境の学習者に「やっぱ」の形式が出現していることは興味深い。そこで、「やっぱ」を使用している個人に注目して調査し、結果を表6に示した。

表6 「やっぱ」を使用した人数

	調査人数	使用人数	(%)	使用頻度
初級学習者	127	0	(0.0)	0
中級学習者	462	16	(3.5)	21
上級学習者	61	6	(9.8)	25
学習者計	650	22	(3.4)	46
母語話者	50	33	(66.0)	139

中級レベルで「やっぱ」を使用した人数は16名(3.5%)で、16名中12名が1回のみ使用している。上級レベルでは6名(9.8%)が使用しているが、3名は1回、1名は2回の使用になっている。

個人で「やっぱ」を多用した中国語母語話者 1 名 (7 回), 韓国語母語話者 1 名 (13 回) については, 日本国内に母語話者の友人がいる学習者, 日本のアニメやドラマに興味を持ち, 多く接している学習者であることが分かった。「やっぱ」を使用した他の学習者にも, 密度を異にして「やっぱ」を多用した 2 名と同じような母語話者との交流, 日本文化 (映画・ドラマ・アニメなど) との接触があるのではないかと思われるが, I-JAS に付属する調査協力者の背景情報からは実証できない。また, 母語話者では 33 名 (66.0%) の人が「やっぱ」を用いていることが観察できた。初対面のインタビュアーとの会話で, 20 代から 50 代の調査対象者が年代に関わらず 50% 以上が用いていることが観察できた。

副詞「やはり」の形式別のアクセント型に関しては, 「やはり」「やっぱり」「やっぱし」は中高型であるのに対し, 「やっぱ」には頭高型・無核型の 2 種類がある。表 7 にデータに出現する「やっぱ」のアクセント型<sup>7</sup>を学習者と母語話者別にまとめた。学習者と母語話者の「やっぱ」のアクセント型について関連を見るために  $\chi^2$  検定<sup>8</sup>を行った結果, 有意な関連が見られた。

( $\chi^2(1)=29.132, p<.01$ ) 残差分析の結果, 学習者は無核型「やっぱ」の出現が有意に多く, 母語話者は頭高型「やっぱ」の出現が有意に多いことが示された。学習者のレベル別では頭高型・無核型の割合に大きな差はなく, 中級レベルでは頭高型 (38.1%), 無核型 (61.9%), 上級レベルでは頭高型 (48.0%), 無核型 (52.0%) であった。それに対して, 母語話者のアクセント型は頭高型 (84.9%), 無核型 (15.1%) と頭高型の「やっぱ」が無核型の 5 倍強存在している。

表 7 「やっぱ」のアクセント型

	頭高型	(%)	無核型	(%)	計
初級学習者	0**	(0.0)	0**	(0.0)	0
中級学習者	8**	(38.1)	13**	(61.9)	21
上級学習者	12**	(48.0)	13**	(52.0)	25
学習者計	20**	(43.5)	26**	(56.5)	46
母語話者	118**	(84.9)	21**	(15.1)	139

\*\* $p<.01$

## 5. 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向

### 5.1 副詞「やはり」の発話における出現位置

本節では, 副詞「やはり」の出現位置について検討したい。I-JAS における発話の区切りについては, 「対話形式のタスクは, 話者の交代をもって改行する」という規則に則って書き起こしがされており, 話者の交代は「#」で示されている。そこで, 副詞「やはり」の出現位置を「ターン冒頭に出現する = 発話開始部」「ターン末尾に出現する = 発話終了部」「やはり」のみで文をなす = 一語文」「発話開始部・発話終了部・一語文のいずれでもない = 発話中間部」として分類

<sup>7</sup> 稿者 1 名の調査による。「やっぱ」を使用した 55 名, 185 データを, 「キー周辺の再生」と「音声ファイル」を用いて聴取し判断した。

<sup>8</sup> 一語文は副詞「やはり」の出現位置という観点では特殊なものであり, 本データにおいて出現数も少ないことから検定の対象から外した。

した。なお、「機能語＋やはり」も発話開始部、「やはり＋機能語」も発話終了部とすることとした。9. 発話開始部・発話中間部・発話終了部・一語文の用例を表8に示す。

表8 発話開始部・発話中間部・発話終了部・一語文の用例

話者	発話内容	位置
【JJJ56】	<C>: ……熱中していることっていうと、山になりますか？#	
	<K>: そうですね<ふーん>はい、まあ手軽で、はい、行けるんでまあ山ですかね#	
	<C>: へー<はい>、今まで<ええ>なんか<ん>すごく一番高いあの山<あー>っていうのはどんなところに行かれましたか#	
	<K>: あー <u>やっぱり</u> 日本だと富士山#	←開始部
	<C>: 富士山#	
	<K>: ですかね <u>やっぱり</u> ねはい#	←終了部
	<C>: ふうん、あとは好きな山とかってあるんですか？#	
【GAT46】	<K>: 好きな山、ですかねー、えー、ま、 <u>やっぱり</u> 行きやすいんで <u>やっぱ</u> 高尾山とか<うんうんうんうん>簡単に手軽に登れるんで高尾山、……	←中間部
	<C>: 日本に行きたい？ [笑] 日本のじゃあ次行くとしたら日本のどこに行きたいですか#	
	<K>: あー#	
	<C>: 沖縄ー#	
	<K>: <u>やっぱり</u> ー#	←一語文
	<C>: リベンジ#	
	<K>: んー、それもいいですね、<はい>	

表中の記号は、<K>: 日本語学習者、<C>: 調査担当者、< >: 相槌、#: 話者交代 を表している。

副詞「やはり」の一語文・発話開始部・発話中間部・発話終了部別の使用数を学習者のレベルごとに集計し、結果を表9に示した。なお、多用した4名のデータ193も集計し表に加えた。

表9 発話の中での副詞「やはり」の出現位置

	一語文 (%)	開始部 (%)	中間部 (%)	終了部 (%)	総計
初級学習者	0 (0)	7 (50.0)	7 (50.0)	0 (0)	14
中級学習者	3 (0.4)	186 (26.7)	493 (70.7)	15 (2.2)	697
上級学習者	4 (1.7)	65 (27.8)	160 (68.4)	5 (2.1)	234
多用した4名	0 (0)	32 (16.6)	161 (83.4)	0 (0)	193
学習者計	7 (0.6)	<b>290**</b> (25.5)	<b>821**</b> (72.1)	20 (1.8)	1138
母語話者	2 (0.3)	<b>116**</b> (16.7)	<b>557**</b> (80.4)	18 (2.6)	693
総計	9 (0.5)	406 (22.2)	1378 (75.3)	38 (2.1)	1831

\*\* $p < .01$

結果から、次の点が観察できた。学習者と母語話者の出現位置との関連を見るために一語文を除いて $\chi^2$ 検定<sup>10</sup>を行った結果、有意な関連が見られた。 $(\chi^2(2)=20.174, p < .01)$  残差分析の結果、学習者は発話開始部の出現が有意に多く、母語話者は発話中間部の出現が有意に多いことが示さ

<sup>9</sup> 機能語の定義は三宅(2005)に従っている。感動詞、助動詞、助詞を機能語とし、接続詞は内容語とした。

<sup>10</sup> 一語文は副詞「やはり」の出現位置という観点では特殊なものであり、本データにおいて出現数も少ないことから検定の対象から外した。

れた。さらに、初級レベルの学習者は、発話開始部、発話中間部とも 50% の出現で、一語文・発話終了部の出現はなかった。中・上級レベルの学習者の出現率は同様の傾向で、一語文は、中級レベル 0.4%、上級レベル 1.7%、発話開始部は中級レベル 26.7%、上級レベル 27.8%、発話中間部は中級レベル 70.7%、上級レベル 68.4%、発話終了部は中級レベル 2.2%、上級レベル 2.1% だった。母語話者は、一語文 0.3%、発話開始部 16.7%、発話中間部 80.4%、発話終了部 2.6% だった。多用した 4 人のデータでは、発話開始部 16.6%、発話中間部 83.4% の出現となっており、母語話者の出現位置の割合に近いことが観察された。

## 5.2 I-JAS データに出現する副詞「やはり」の意味・機能

本節では、学習者と母語話者が用いた副詞「やはり」の意味・機能を検討する。2.1 の表 2 で述べた副詞「やはり」の意味・機能の枠組みに従い分類した。その用例を表 10 に示す。

表 10 本稿で用いる副詞「やはり」の意味・機能の用例

I-1 依然として、I-2 同様に、I-3 同じ結果に帰結	
(1) 学生時代に友達が事故で亡くなった話 (1 - 1)	
<K> もう四半世紀だってゆって <C> <うん> <K>, で, なんか同窓会になってもその話 <C> <あー>	
<K>, で, ちょっと前でも, <u>そ, やっぱり</u> , その話 #	【JJJ23】
(2) 話し手が熱中していること, パンの話が続いている (1 - 2)	
<K> えーとですね, えー, 私の一番仲のいい友達で, <u>やっぱり</u> , パン好きなんです, <へー> ……	【JJJ32】
(3) 両親は誕生日も忘れていたし, 喧嘩もしたという子供の頃のエピソード	
<C> あじゃあそのままその日は, 覚えてなかったんですか, わすれ最後には, 分かったんですか	
#<K> うんー最後, あ, <u>やっぱり</u> , 晩御飯は一緒に食べました #<C> うんうんうん	【CCM13】
II 予期した通り: 出身地で名産は何かという質問への回答	
(4) <K> あー応その, 漁港で, <C> <んー> <K> たまに, なんか, 漁獲高日本一みたいなやってるんで,	
<u>やっぱ</u> , 海鮮がおいしいかなと, 思います #	【JJJ03】
III 熟考した結果: 都会と田舎どちらに住みたいかという質問と回答	
(5) (「中間はだめ」と言われている) <C> ど, どっちか, どっちか #<K> どっちー #<C> うーん #<K> うーん, うーん, <u>やはり</u> , 都会かな #	【CCT37】
IV 他の選択肢の排除: 何が専攻したいかという質問と回答	
(6) <K> ……例えばあの【大学名 2】 #<C> んー, の, 大学院ね? #<K> 大学院です #<C> それはだから英語科? 日本語科? #<K> んー, 英語, <u>やっぱり</u> , 日本語いえ日本語より英語のほうが好きです #	【CCM46】
V 形式・内容の選択途中: 子供の頃, 友達を作るのは上手ではなかったという語り	
(7) <K> ……私はちょっとなんかええとシャイの方でしたから, ……自分で本を読んだりするとか, ええと勉強したりするとかー <C> <うん> <K> 人でしたが <C> <うん> <K>, でー, <u>やっぱ</u> , ええと, 何てゆうかうーん #	【EUS14】

データの中で使用された副詞「やはり」の意味・機能を枠組みに従って分類・集計し、学習者のレベル別の使用数を表 11 に示した。用例の中に、文意を推し量ることができず意味・機能の判断ができなかった用例が 15 例あり、「不明」として表に記した。また、多用した 4 名のデータ 193 も集計し表に加えた。

結果から次の点が観察できた。学習者と母語話者の意味・機能の使用数の関連を見るために出

現数が少ない「IV」のデータを除き、「I」「II」「III」「V」について $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な関連が見られた。 $(\chi^2(3)=82.077, p<.01)$  残差分析の結果、学習者は「III 熟考した結果」での使用が有意に多く、母語話者は「I-1 依然として、I-2 同様に、I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」「V 形式・内容の選択途中」での使用が有意に多いことが示された。さらに、初級レベルの学習者は、使用数が14と少ないため、傾向の判断は安定していると言えないが、「III 熟考した結果」での使用の割合が57.1%で最も多かった。中・上級レベルの学習者の使用の割合は、「I-1 依然として、I-2 同様に、I-3 同じ結果に帰結」では中級レベル29.3%、上級レベル31.2%、「II 予期した通り」では中級レベル5.9%、上級レベル6.8%、「III 熟考した結果」では中級レベル48.5%、上級レベル53.8%と日本語のレベルが上がるに従い漸増している。一方、「V 形式・内容の選択途中」では中級レベル15.1%<sup>1</sup>、上級レベル7.7%と割合は半減している。多用した4名はSPOTによるレベルでは中級に属するが、「III 熟考した結果」は28.5%と中級学習者の約60%であり、「V 形式・内容の選択途中」は26.9%と中級レベルの学習者の割合の1.5倍強となっている。

表 11 本データで使用された副詞「やはり」の意味・機能

	I	(%)	II	(%)	III	(%)	IV	(%)	V	(%)	不明	(%)	総計
初級学習者	2	(14.3)	2	(14.3)	8	(57.1)	0	(0)	1	(7.1)	1	(7.1)	14
中級学習者	204	(29.3)	41	(5.9)	338	(48.5)	2	(0.3)	105	(15.1)	7	(1.0)	697
上級学習者	73	(31.2)	16	(6.8)	126	(53.8)	0	(0)	18	(7.7)	1	(0.4)	234
多用した4名	69	(35.8)	10	(5.2)	55	(28.5)	1	(0.5)	52	(26.9)	6	(3.1)	193
学習者計	<b>348**</b>	(30.6)	<b>69**</b>	(6.1)	<b>527**</b>	(46.3)	3	(0.3)	<b>176*</b>	(15.5)	15	(1.3)	1138
母語話者	<b>269**</b>	(38.8)	<b>97**</b>	(14.0)	<b>190**</b>	(27.4)	0	(0)	<b>137*</b>	(19.8)	0	(0)	693
総計	617	(33.7)	166	(9.1)	717	(39.2)	3	(0.2)	313	(17.1)	15	(0.8)	1831

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

### 5.3 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向

本節では、本調査の対象がインタビューデータであることを念頭に置き、副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た学習者の使用傾向を用例を引いて記述する。5.1、5.2の調査の結果から、「学習者の発話開始部における産出」「母語話者の発話中間部における産出」「学習者と母語話者の「V形式・内容の選択途中」での産出」に特徴があることが観察された。

#### 5.3.1 学習者の発話開始部における産出

発話開始部において、学習者が有意に多くの副詞「やはり」を使用していることの内実を見ると、表12に示した通り、学習者の使用数290の中の241(83.1%)が「III 熟考の結果」での使用であった。本データが基本的に質問と回答の連鎖から対話が成り立っていると考えられるインタビューデータであることから、発話開始部においてはインタビューアの質問に対する回答が発話される。下記の用例(2)(3)はYN疑問文、(4)(5)は選択疑問文、(6)(7)(8)はWH疑問文でなされた質問とその回答の用例だが、副詞「やはり」は前接する疑問文の形式のいずれにも違和感なく、熟考した結果の回答として機能していることが観察できる。

表 12 発話開始部における副詞「やはり」の意味・機能別の使用数

	I	II	III	IV	V	不明	計
学習者	39	5	241	1	3	1	290
(%)	(13.4)	(1.7)	(83.1)	(0.3)	(1.0)	(0.3)	(100)
母語話者	25	10	74	0	7	0	116
(%)	(21.6)	(8.6)	(63.8)	(0.0)	(6.0)	(0.0)	(100)
総計	64	15	315	1	10	1	406

- (2) <C> やっぱりお金が大切ですか？ #  
 <K> やっぱり， お金が大切 # 【VVN41】
- (3) <C> あー， 中国のドラマと日本のドラマって違いますか？ #  
 <K> やはり， 違い， と思います # 【CCM49】
- (4) <C> (時間とお金) うん， どちらも大事ですね， だけどどっちかってゆったら？ #  
 <K> やっぱ， お金かな # 【KKD33】
- (5) <C> (タイ語と日本語) そうですか， タイ語とどっちが難しいですか？ #  
 <K> えっとー， やっぱり日本語です， はい # 【TTH30】
- (6) <C> この大学を卒業したらどんな仕事をしたいですか？ #  
 <K> {笑} うーんえっとー やはり私は先生になりたいと〈うーん〉思います……  
 【IID13】
- (7) <C> んー， そうですか， その『ワンピース』の中で， どの， 人物が好きですか？ #  
 <K> んー， やはりルフィかな # 【CCM01】
- (8) <C> (都会がいいという回答に対して) ……何ですか？ #  
 <K> ん， んー， やはり， ちょっと便利だし〈うんうんうんうん〉， あー， 安全性も〈うん〉，  
 都会のほうがいいかもしれないと思っていますね 【KKD05】

### 5.3.2 母語話者の発話中間部における産出

発話中間部において，母語話者が有意に多くの副詞「やはり」を使用していることの内実を見ると，表 13 に示した通り，母語話者の使用数 557 の中で 237 (42.5%) が「I-1 依然として，I-2 同様に，I-3 同じ結果に帰結」での使用であった。さらに「I-1 依然として」「I-2 同様に」「I-3 同じ結果に帰結」別では，「I-1 依然として：17 (7.2%)」，「I-2 同様に：193 (81.4%)」，「I-3 同じ結果に帰結：27 (11.4%)」であり，出現数の約 8 割が「I-2 同様に」での出現であった。

表 13 発話中間部における副詞「やはり」の意味・機能別の使用数

	I	II	III	IV	V	不明	計
学習者	302	52	281	2	170	14	821
(%)	(36.8)	(6.3)	(34.2)	(0.2)	(20.7)	(1.7)	(100)
母語話者	237	81	112	0	127	0	557
(%)	(42.5)	(14.5)	(20.1)	(0.0)	(22.8)	(0.0)	(100)
総計	539	133	393	2	297	14	1378

発話内で逆接・順接の接続表現が副詞「やはり」に先行して出現する場合については、曹（2001）で指摘されているが、複文での副詞「やはり」の使用の多さは母語話者の特徴であると考える。(9) (10) (11) に逆接の接続表現が先行する環境で、(12) (13) に順接の接続表現が先行する環境で副詞「やはり」が出現する用例を示す。

- (9) <C> ……年末の、なんか、予定とかもう決まってるんですか？ #  
 <K> 年末は特に予定決まってるんですけどやっぱりディズニーランドの〈あ〉、年越しの、  
 があって 〈はい〉、でも、抽選制で 〈あ〉、十月の初旬に結果が来るんです……【JJ06】
- (10) <C> どんな夢がありますか？ #  
 <K> えーっとですねー 〈うん〉 夢ですね、まあやっぱり研究者を目指してるわけーなん  
ですけど、〈はい〉、んーなるべく、やっぱり、そのー、なんかそのーまあさまつなね、  
 なさまつな、やっぱり、その、やっぱりほんとにー、少しはなんか、ねー後に残るよ  
 うな研究をしたいなって……【JJ04】
- (11) <K> 人が集まると組織になるわけでー #  
 <C> うん #  
 <K> でもするとなかなかー何かー、を、を、するってゆう仕事をするってゆう上でやっぱり  
 どうしても、いろいろ時間がかかったりとか 〈うん〉、あーなんかこうなかなか実益  
 につながらないちょっと 〈ふーん〉 しがらみがあったりとかって 〈はい〉 あると思う  
んですけど、やっぱ、そういうところできるだけなくしてー #【JJ13】
- (12) <C> なるほど、なんかお料理でこう名産とか #  
 <K> あー応その、漁港で、〈んー〉 たまに、なんか、漁獲高日本一みたいなのやってるんで、  
やっぱ海鮮がおいしいかなと、思います #【JJ03】
- (13) <K> そうですね 〈うん〉 それはありますね <C> 〈うん〉 <K> やっぱり盆地なので <C> 〈う  
 ん〉 やっぱりこう山に囲まれてるので <C> 〈ふーん〉、やっぱり、.、なんていうんです  
 かね、寒暖の差はありますね……【JJ56】

石黒（1999）は、「逆接は、前提という一般性の高い関係を否定することから生じる抵抗感を和らげる表現である」と述べている。逆接の接続表現の存在は、ここまでの対話の情報を受容したこと、そしてそれを踏まえてここまでの流れとは別の方向で発話することの前触れである。(9) (10) (11) の用例で、「～けど、やはり……」「でも、やはり……」と続く流れから、聞き手は (9) 「年末の予定は決まっていないが、何か選択肢がある」、(10) 「話し手が研究者を目指しているという共通基盤を理解したうえで発言が続く」、(11) 「しがらみがあることは当然だと思っているうえで発言が続く」と、次の内容の方向を予測して、構えて聞くことができるのではないかと。「確かに」「なるほど」「もちろん」を用いた譲歩構文と通じるものがある。

同様に、順接の接続表現の存在は、対話の相手との共通基盤を提示する役割をしている。(12) (13) の用例で、(12) は「漁獲高日本一をやっているという新情報を話題に登場させ、選択肢の範囲を限定する」、(13) は「この後の発話の前提として、盆地であること、山に囲まれているこ

とに言及する」という会話の共通基盤を作る機能を果たしていると考ええる。

### 5.3.3 学習者と母語話者の「V形式・内容の選択途中」での産出

副詞「やはり」が「V形式・発話の選択途中」で用いられる場合、「発話内容の吟味や適切な表現を選択・編集の心的操作を表示する」機能を担っていると考えられる。「V形式・発話の選択途中」の用例は学習者も母語話者もフィラーと共に起す場合が多い。「V形式・発話の選択途中」での副詞「やはり」の使用数と割合を表14(再掲表11)に示した。中級学習者は15.1%(105/697)、上級学習者は7.7%(18/234)と、上級での使用の割合は中級の約2分の1になっている。また、母語話者の使用の割合は19.8%(137/693)であった。学習者と母語話者の産出の特徴を検討するために、(14)(15)に学習者の用例、(16)(17)に母語話者の用例を示す。

表14「V形式・内容の選択途中」の使用数と割合(再掲表11)

	V	(%)	総計
初級学習者	1	(7.1)	14
中級学習者	105	(15.1)	697
上級学習者	18	(7.7)	234
多用した4名	52	(26.9)	193
学習者計	176	(15.5)	1138
母語話者	137	(19.8)	693
総計	313	(17.1)	1831

- (14) <K> (来日して驚いたことは何かという質問への回答, 先生に教えてもらっていた)  
 ただ, あの日本に来て, あ, や, やっぱり, あー, あー, 教えた通りに#  
 <C> うん#  
 <K> ですから, あんまりあー, 驚いたことはありません# 【RRS32】
- (15) <K> (故郷を語る) あむ, 私はね, とっても小さいむ, むり, 村から, <はい> あの, 来ますから, まあ, やっぱり, あの一, えーあの一, 町に歩いて人と, みんなを知りますから, <はー> まあ, ん, いつも, あの, あいさつをして, …… 【HHG26】
- (16) <C> うんー, じゃ時間もお金で買える#  
 <K> 買えると言うわけじゃないんですけども, うんーうなんだろうなーと, やいやーやーやっぱそうかな, どっちだろうな<うん> 時間かなお金か, いやお金かなーと<笑!>  
 いやーむいやこれは難しいですね# 【JJJ35】
- (17) <K> (これからの夢を聞かれて) そーっすねー やっぱり一, あの, えー, まあ, いわゆるまあ私はこの世界で別に, <はい> スターでも何でもありませんから, 黙ってて, <うん> 仕事に来るわけないわけですね…… 【JJJ50】

学習者の産出では、(14)は「日本のイメージは(先生に)教えてもらった通りですから」と述べる際にフィラー「あ・あー」「や」と共起して、(15)は「小さい村から来ましたから、町を歩いている人をみんな知っているから」と述べる際にフィラー「まあ」「あの一」「えー」と共起



して「やはり」が出現しており、話すべき内容や表現の選択をしていることが見て取れる。一方、母語話者は(16)では大切なのは時間かお金かに迷う話し手の判断過程の言語化として、(17)は「自分はスターではないので黙っていて仕事に来るわけではない」という話し手が判断に迷う場合に出現している。また、野田(2015)は、非母語話者の感動詞の不自然な運用の特徴の一つとして「どう返答するかを考えているときに「そうですね」などを使わずに沈黙が続く場合がある」と述べ、その原因として、「考えているときに沈黙を避ける表現を習得していないこと」、「答えを考えながら自動的にその表現を使えるまでに至っていないこと」の2点を挙げている。本節で用いた用例でも、母語話者は(16)「うんーうなんだろうなー」(17)「そーっすねー」に後接して「やはり」が出現しており、「迷っている、考えている」ことを対話相手に伝え、沈黙が生じる緊張を緩和している例が観察できた。母語話者の発話で、無意識に産出されるフィラーの中にも出現する「やはり」は、単なる間つなぎではなく「考えているから少し待ってほしい」という発話者の心的状況を対話の相手に伝える働きをしていると考える。

## 6. まとめ

研究課題に従って本稿をまとめ、残された課題を述べる。

### 1) 副詞「やはり」の使用数、形式から見た使用実態はどのようなものか。

母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では母語話者の使用に特徴がある。副詞「やはり」を使用した学習者は全体の4分の1であるのに対し、母語話者は対象の全員が副詞「やはり」を使用していた。また、使用した個人の平均も学習者の2倍強使用しており、本データの調査では母語話者の副詞「やはり」の多用が観察できた。

副詞「やはり」の3形式では、学習者は「やっぱり(79.9%)」「やはり(16.1%)」「やっぱ(4.0%)」の順に、母語話者は「やっぱり(75.5%)」「やっぱ(20.1%)」「やはり(4.3%)」の順に使用している。学習者の「やはり」「やっぱり」の使用は学習者が使用した教材に関係がある。母語話者は、初対面のインタビュアーとの会話で、「やっぱ」は年代に関わらず50%以上の人が用いていることが観察できた。

### 2) 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用実態はどのようなものか。

学習者と母語話者の副詞「やはり」の出現位置と意味・機能の調査から、学習者は発話開始部での出現が有意に多く、インタビュアーの質問に対して回答する際に「III 熟考した結果」として用いられていることが観察できた。母語話者は発話中間部での出現が有意に多く、複文の中で逆接・順接の接続表現に後接する環境で、会話の前提や共通基盤を述べる際に用いていた。意味・機能では「I-2 同様に」での使用が多かった。また、「V 形式・発話の選択途中」での使用は、フィラーと共に共起することが多いことは共通しているが、学習者は内容と表現の選択であるのに対し、母語話者は「迷っている、考えている」ことを対話相手に伝え、沈黙が生じる緊張を緩和している用例が観察できた。

## 参考文献

- 石黒圭 (1999) 「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198: 114-129.
- 加藤薫 (1999) 「「やはり」論の問題点—その対立する論点の整理と展望—」森田良行教授古希記念論文集刊行会 (編) 『日本語研究と日本語教育』165-183. 東京: 明治書院.
- 川口良 (1993) 「日本人および日本語学習者による副詞「やっぱり」の語用論的前提の習得について」『日本語教育』81: 106-127.
- 金水敏 (1992) 「副詞「なほ」について」筑波言語文化フォーラム (編) 『対照研究 第2号 発話マーカーについて』48-54.
- 工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所研究報告集』3: 45-92.
- 小磯花絵 (2019) 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版—話し言葉研究の展開—」シンポジウム「日常会話コーパス」IV 口頭発表. 国立国語研究所, 2019年3月4日.
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (編著) (2007) 『日本語能力試験 出題基準 改訂版』東京: 凡人社.
- 迫田久美子・小西門・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6: 93-100.
- 曹再京 (2001) 「順接と逆接の論理からみた「やっぱり」の機能について」『言語科学論集』5: 37-48.
- 西原鈴子 (1988) 「話者の前提—「やはり(やっぱり)」の場合」『日本語学』7(3): 89-99.
- 野田尚史 (2015) 「日本語非母語話者の感動詞の不自然な使用」友定賢治 (編) 『感動詞の言語学』149-165. 東京: ひつじ書房.
- 蓮沼昭子 (1998) 「副詞『やはり・やっぱり』をめぐる」吉田金彦 (編) 『ことばから人間を』133-148. 京都: 昭和堂.
- 深尾まどか (1995) 「副詞「やはり」「やっぱり」について」『南山日本語教育』2: 25-49.
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1(3): 61-76.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』東京: 角川書店.
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』東京: くろしお出版.
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1: 63-88.
- 山崎誠 (2019) 「国立国語研究所コーパスの統計情報—BCCWJ 語数表・語彙表ほか—」『計量国語学』32(1): 33-40.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』東京: 宝文館.
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』東京: 塙書房.

## 関連 Web サイト

国立国語研究所 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> (2020年3月21日確認)

国立国語研究所 『日本語日常会話コーパス』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/search> (2022年6月11日確認)

## Japanese Language Learners' Use of the Adverb “yahari” in I-JAS Interview Data: A Comparison with Native Speakers of Japanese

SUZUKI Hideko

Hitotsubashi University Graduate School Doctoral Program / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

Research on the use of the adverb “yahari” by native speakers has primarily focused on its morphological variation and multiple meanings and functions, resulting in a lack of research on its actual use by Japanese language learners. Therefore, using data from the I-JAS, which enables comparison between the actual usage of learners and native speakers, we investigated the adverb “yahari” *vis-à-vis* its frequency of uses, form, position of occurrence, and meaning/function. Therefore, the following four points were observed. (1) The trend in the adverb “yahari” regarding its frequency of occurrence in the native language shows that native speakers use “yahari” more frequently than learners. (2) Of the three forms of the adverb “yahari,” learners use “yappari,” “yahari,” and “yappa,” while native speakers use “yappari,” “yappa,” and “yahari” in that order. (3) Learners frequently used the adverb “yahari” in the initial part of a speech. We observed that they use it with the meaning and function of “as a result of deliberation” when answering questions. (4) Native speakers frequently used the adverb “yahari” in the middle part of speech to state conversational assumptions and common ground in an environment where they were post-occupied with inverted and sequential conjunctive expressions in compound sentences.

**Keywords:** learner corpus, interview data, “yappari”, “yappa”, meaning/function